

# カムチャッカ旅行雑記

小林 裕

カムチャッカ研究会の現地訪問団の一員として、8月12日から16日までの5日間、ペトロパブロフスク・カムチャッキー市を訪問した。当地で開催された「廃棄物処理システムセミナー」を軸とした貴重な体験について、私から見た本論の補足的状況説明と若干の感想を記述したい。

この旅行の誘いをはじめて受けた時は、カムチャッカ半島についてほとんど知識がなく、廃棄物で困っているらしいという話にも現実のものと捉えるができなかった。ただ、すばらしい自然が手付かずに残る美しい半島という言葉に、この目で一度見てみたいという憧れの思いが募ったことを覚えている。5月下旬からセミナー開催に向けて準備を始めたのであるが、日本国内のデータを改めて整理し、アジア諸国の廃棄物事情を教わり、徐々にセミナーのイメージを膨らませる過程を通して、カムチャッカへの思いが心のどこかに染み入るのが感じられた。そして、2ヵ月半に及ぶ準備期間を経て、今年初めて開設されたウラジオストック航空の成田ーエリゾボ直行便に搭乗したのであった。

ロシア製の機材は古くて快適とはいえなかったが、期待を胸に抱いての約3時間20分のフライトは大変短く感じられた。雲に隠れて地上を見ることはできなかったが、時間の経過から想像する北海道上空から千島列島への移動に心の高鳴りを覚えた。そしてジェット機が高度を下げ、突然ヴィルチンスキー山が視界に入った時に、淡い憧れが目の前に現れた喜びで胸がいっぱいになった。機内のあちこちで思わず歓声があがる。

エリゾボ空港に降り立ったのは現地時間で午後7時30分ごろ。小さなイミグレーションを通過して外に出ると8月だというのに涼しく清々しい。空港建物の周りに我々には季節外れのパンジーの花が咲き誇っていた。そして目の前に現れたのがアバチャ山。西日を浴びて山頂の雪がやわらかい光に包まれる美しい景色であった。いつ夕暮れが訪れるのかななどと思いながらバスに乗ってペトロパブロフスクホテルに向かった。

カムチャッカ州の州都でもあるペトロパブロフスク・カムチャッキー市の中心に近いホテルに到着し、フロントにパスポートを預けてチェックインした。9時を過ぎているというのにまだあたりは明るい。我々一行は10時ごろから遅い夕食を取った。サラダとボルシチのような料理とサーモンのソテーが出た。意外にあっさりしていて結構おいしい。ロシアの料理にはやはりウオッカだとさっそく注文する。ようやく夕暮れが訪れ気温が一気に下がる。ひんやりした外気が部屋の中に入って、ウオッカで温まった体に心地よい。明日以降に期待を寄せつつ1日目を終えた。

第2日目は日曜日という事もあって、観光インフラの視察を兼ね6輪駆動車に乗ってアバチャ高原へでかけた。我々を案内してくれる地元旅行者の社長とお孫さんのステファン

(6歳)と一緒に乗り込んだ。ペトロパブロフスク・カムチャッキーとエリゾボを結ぶ幹線道路から脇道に入ると、あとは雪解け水が枯れかけた川をひたすら上って行く。車は川を横切り雪渓をよじ登るように走る。雪渓で小休止をし、子供と雪合戦をして遊んだ。この子が将来日本に興味を持ち、日本と心をかよわせる青年に育ってくれればという気持ちが湧いてきて楽しいひと時であった。



アバチャ高原にて

約2時間で、高原のキャンプに到着した。飛行機で一緒だった日本人観光客のグループと再会し、旅の目的などを話し合った。このキャンプで3泊しトレッキングを楽しむのだそうだ。多少うらやましさを感じながら、我々一行は短い時間を惜しむように高山植物観察トレッキングに出かけた。右にアバチャ山、左にコリャーク山を望みながら、小さな花にカメラを向け、花の名前などガイドの説明に一生懸命耳を傾ける1時間ばかりの楽しい時間であった。帰りにパラツンカ温泉に立ち寄り、水着に着替えて温水プールで泳いだ。短い夏を楽しむロシア人も大勢来ていた。半年は雪に閉ざされるというこの地方の人々の心はこの時期は開放感で満たされるのであろう。

さて、3日目からはいよいよ主目的の仕事である。第3日目は廃棄物の最終処分場の見学と町のごみ収集の様子を視察することになっている。朝9時に市の職員と現地の通訳が我々の宿泊するホテルに迎えに来てくれた。

まず、市の中心部から東に10 kmほど離れた廃棄物処分場に行った。快晴の青空にそびえるアバチャ山に感激しつつ10分ほど車で走ったところにその処分場はあった。ゴミ山の頂上で車から降りてあたりをぐるっと見渡して、思わず唖ってしまう。鼻を突く臭い、ゴミに群がるかもめ、大量のハエと蚊。現地で一生懸命に取り組んでいる方々には申し訳ないが、ゴミの量や有害物質の溶出はともかく、衛生面でも大変心配だ。そして処分場ではお決まりのスカベンジャーと思われる人が目に入る。この地でもゴミが商いされるのだろうかなどと想像しながらカメラのシャッターを切る。本論のレポートで紹介したようなアバチャ山とゴミ山の合成写真のような現実が写っていた。

ある場所ではゴミの中から煙が上がっている。自然発火しているのであろう。直ちに危険とまでは言えないが、決して良いことではない。我々の手で消化する手段も無く、現地の管理者はどのように消化するのか見ることはできなかった。ゴミをじっくり観察すると、一般の生活ゴミからドラム缶、廃棄した机、缶、ビンなどが散らばっている。一定の割合で覆土するという説明を受けたが、それ以上の詳しいことは分からなかった。

次に訪れたのは市内の団地の一角。共同のゴミ箱が置かれた所で車を降り、ゴミの観察をしながら収集車が来るのを待った。収集時刻を知っている市の職員が先回りしてくれたのであろう。観察を始めてすぐに収集車が到着してゴミの回収を始めた。事前の説明でゴミの分別をしていないことを知っていたので、さほど驚かなかったが、確かに何でも捨てられている。時折住民がゴミを捨てに来る。スーパーの買い物袋と見えるビニール袋に入れたゴミを捨てて行く。ゴミ箱にはフタが無いのでぞんざいに捨て去るという感じだ。このような状況がこの町の一般的な姿であるということであつた。ゴミ収集車が走り去った後はゴミが散らばりすぐにカラスが集まってきた。これでいいのかなと思っていたら、お掃除専門のおばさんが掃除を始めた。収集車のあとを追いかけているのだそう。さすがに町の中はきれいにしておきたいのであろう。

要領よく視察を終えたあと、市の職員と翌日のセミナーで会うことを約束して市役所前まで送り届けた。午後は州政府のビジネスプレゼンテーションがある。短い時間を縫って通訳の女性が気を利かせてアバチャ湾を一望できる高台に連れて行ってくれた。遠くにヴィルチンスキー山が見える絶景のスポットであつた。



アバチャ湾全景

(右側がペトロパブロフスク・カムチャッキー市、左にヴィルチンスキー山が見える)

港の見える公園を訪れた際、茂みの中に高校生ぐらいのグループが目についた。通訳に聞くと、学生がボランティア活動として公共の場所のゴミ拾いをしているとのこと。えらいなあと感心しつつ、よく見るとペットボトルなどが転がっている。日本でも道路わきにゴミが散乱している光景をあちこちで見かけるが、この町には特にふさわしくない。観光客が捨てていくケースもあるのだろうが、市民にも意識づけをしなければならないと実感した。

午後は州政府を訪問し、第1副知事はじめ関係者出席のもとそれぞれの分野のプレゼンテーションを受けた。内容は私の専門外の分野でもあり、別のレポートに委ねることしたい。ただ、会場の後ろの方に若いお嬢さんが2人。

夜は訪問団主催の交歓レセプションがあった。ロシア語はまったく分からないし、現地の人と会話をしたくてもお互いに片言の英語では弾みようもない。挨拶の言葉を通訳してくれる以外は言葉につまる。昼間州政府で見かけたお嬢さんがここにも参加しているが、話したくても話せるわけが無い。と思い込んでいたらなんと日本語を学んでいる学生さんとのこと。日本語で語りかけたらかなり滑らかな日本語が返ってくる。昼間も日本語の勉強をするために同席していたのである。現地で日本語教育をされている先生方に心の中で敬意を表しつつ日本語での会話を楽しんだ。このような若い人達が日本のファンになってくれることを大いに期待したい。食事もお酒も大変おいしく、和やかな時間であった。

第4日目は9時過ぎにホテルを出発して、「廃棄物処理システムセミナー」会場である市役所に向かった。この日のために日本からパソコンとプロジェクターを持ってきた。重い荷物を提げて会議室に入ると、すでにパソコンとプロジェクター、スクリーンが用意されていた。歓迎されていることを感じ取って、すぐに準備に入る。データを職員に渡すと手際よくスクリーンに映し出す。カムチャッカが近くに感じられた瞬間であった。技術の進歩といってしまうえばそれまでのことだが、最新の機器は国籍を感じさせないことを実感した。

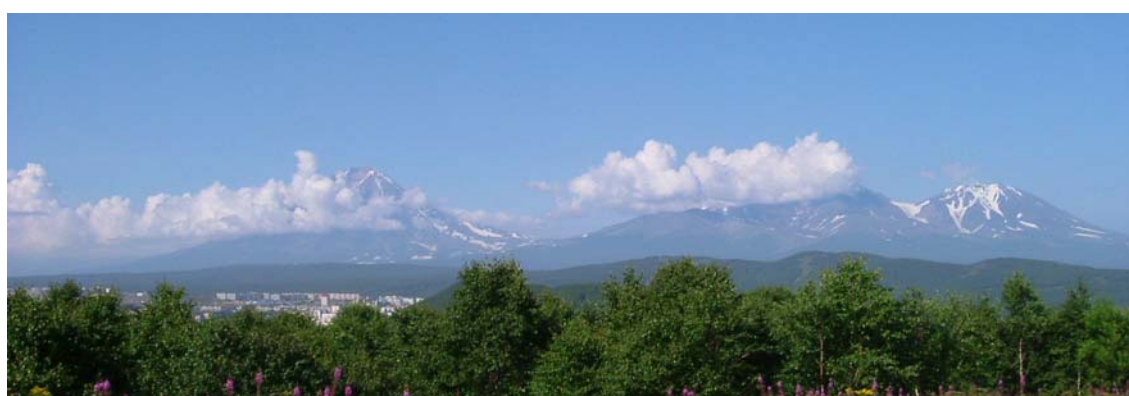
定刻の10時前に全ての準備を済ませることができた。そこにペトロハブロフスク・カムチャッキー市長が入ってきていよいよセミナーの開催となった。地元のテレビ局も取材に来ている。市長の挨拶からはじまり、我々一行があらかじめ決めていた役割を分担してセミナーを進める。160枚に及ぶ写真や資料をパワーポイントを用いて説明した。この紙面で全部紹介できないのは残念だが、本論中に記述した要旨に従って、途中で小休止を取ったものの4時間ぶっとおしのプレゼンテーションとなった。

私自身はほんの一部を担当したに過ぎないが、全体としてはまとまりのある内容だったと思う。我々の日本語をロシア語通訳してくれたアンドレイさんにはこの紙面をお借りして心から感謝したい。4時間のセミナーで最も大変な役割ではなかったかと思う。我々は分担だが通訳は分担できないのだから、気の休まる時間がなかったのではないかと思う。持参した資料は英語で統一したのであるが、これがどのくらい役立っているのか見当がつかない。質疑応答はかなり具体的で専門的な話し合いをすることができた。言葉の壁を何

とか乗り越えて成果は充分にあったと思う。

市役所を発ったのは確か2時半を過ぎていたと記憶している。目的は達せられたとの思いでホテルに戻り我々一行は遅い昼食を取った。それぞれの目的で分かれて行動していた訪問団一行の帰着を確かめた後、到着した日と同じ食堂でカムチャッカの最後の夕食を共にした。

最終日は朝早く起きて食事を済ませ、7時にホテルをあとにした。バスでエリゾボ空港に着くと待合室で少しくつろいだあとチェックイン。日本とはサマータイムも含めて4時間の時差があるこの町を10時に飛び立ち、成田空港に9時半ごろに着陸したのであった。



アバチャ山とコリャーク山

今回カムチャッカを訪問してさまざまなことを感じ取ることができた。私にとってカムチャッカが身近で親しい町となった。さまざまなお世話をしていただいたカムチャッカ研究会関係諸先輩、ならびに同行の諸氏に心から感謝申し上げる。高校の大先輩とお会いすることができたことも大変うれしいことのひとつであった。今回の貴重な体験を隣国との交流に少しでも生かせるよう、自分の糧にしたいと考えている。